夕霧と柏木

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森安, 愛子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4704

夕霧と柏木

森安愛子

はじめに

『源氏物語』は、五十四帖にもなる長編小説である。自然と人物の心の動きを見事に融合させ、宮廷生活の種々相を描いている。これらの中で、人生の締括りである臨終の場面には興味が尽きない。なぜなら、臨終にはその人の人生が凝縮されていると思うからだ。

『源氏物語』の登場人物において、葬送や哀惜などを詳細に描写されるのは、主に女性である。確かに物語中に男性の死も書かれてはいるが、女性の死と比べうるものは、柏木の死の他にはない。

本稿では、多くの女性の死の中にあって精彩を放つ柏木の死を、彼の親友である夕霧の視点から考察したい。

第一章　柏木の死

（一）夕霧と柏木の人間像

夕霧と柏木が親友であると共に、ライバル関係を築いているのは彼らの父たちと同様である。この二つのライバル関係をみると、親の世代より子の世代の方が身分差が大きい。柏木は夕霧に官位で遅れをとってしまっている。夕霧を越えられない位置に柏木は存在する。

まず夕霧を見ていく。「進士になり」（少女）「秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ」（同）とあり、この時夕霧は十三歳である。十四歳左中将、十六歳宰相中将、十八歳中納言、十九歳中納言兼右大将、二十五歳大納言兼左大将、と順調に位を進めている。

対する柏木は、「まことや、衛門督は中納言になりにきかし」（若菜下）とあるように、三十一、二歳で中納言までようやく辿り着いたと言える。夕霧が十八歳で達している中納言であるが、柏木は三十一、二歳までその地位を得られなかった。夕霧と柏木の間には、これだけの差があるのだ。しかし柏木は、「何ごとをも人にいま一際まさらむ」（柏木）と思い続けている人物である。夕霧に出世で先を越されるのは、柏木は百も承知しているだろう。承知していても、心の底では強烈に出世を望んでいると考えられる。親の期待と、そ

れに応えたいという野心が、柏木を女三の宮へと向かわせる原動力になっていく。

次に夕霧の性格を見ていく。夕霧の性格は源氏・柏木と比較されて描かれる。柏木の父が語るところによると、

かれはただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公ざまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。これは才の際もまさり、心用ゐ男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえためり

（藤裏葉）

である。また柏木の女房たちには、

かの君は、五六年のほどの年長なりしかど、なほいと若やかになまめき、あいだれてものしたまひし。これは、いとすくよかに重々しく、男々しきけはひして、顔のみぞいと若うきよらなること、人にすぐれたまへる。（柏木）

という思いがある。源氏と柏木は「なまめかし」「なまめく」と共通点も見られるが、この二人と夕霧の共通点はない。夕霧は学問に長け、重厚で男らしい人物である。そして気高く美しい。

では次に柏木について見ていく。柏木の容姿については、「いとあてやかにきよげなる容貌して、御直衣の姿、好ましく華やかにていとをかし」（藤袴）と誉められているが、「宰相中将のけはひありさまには、え並びたまはねど」（同）と、柏木は夕霧には及ばない人物と評される。

その柏木の性格は、所々で描かれるのみである。

①思ふとも君は知らじなわきかへり
岩漏る水に色し見えねば
書きざまいまめかしうそぼれたり。（胡蝶）

②「さてこの若やかに結ぼほれたるは誰がぞ。いといたう書いたる気色かな」（同）

③公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さる中にもいと静まりたる人なり。（同）

④右の中将は、ましてすこししづまりて、心恥づかしき気まさりたり。（常夏）

①②は玉鬘宛の柏木の恋文を見た源氏の感想である。柏木が当世風ですぐれた人であることが読み取れる。③④は静かで落ち着いた、気品のある柏木の人柄を語っている。しかし、当世風の洒落た恋文を書く心と、静かで落ち着いている、というのにはギャップがある。静かで落ち着いているのは飽くまで外に表れる部分のみで、柏木の内面には出世欲が潜んでいた。

内面が本当に落ち着いている夕霧は、外面にも自然に思慮深さがみえてくる。柏木は、静かで落ち着いていたいと思い、努力している人間である。ここに、両者の大きな相違がみられる。しかし、正反対とも思える二人が、仲の良い間柄だということは物語中でよく語られている。

常に冷静な夕霧は、物語世界における重要な視点人物である。夕霧の視線が六条院世界を相対化させているのだ。視点人物的な夕霧の行動は野分巻あたりからみられる。夕霧は持ち前のまめな性格か

ら、野分の見舞いに六条院を訪ね、紫の上を垣間見ることになる。紫の上の魅力に心惹かれるものの、夕霧は強靭な自制力で紫の上との密通を回避していく。

高橋亨氏は、

夕霧が紫上と密通して子どもが生れるというのが、六条院物語に底流する可能態の物語である。それはついに現実化することなく、野分の巻で物語の表層にかたちを現わした時も、すでにその不可能性を示しているというべきであった。[注1]

と述べられている。夕霧は視点人物であるがゆえに、行動をおこさないのだ。夕霧と紫の上の「可能態の物語[注2]」が、柏木と女三の宮の関係へと変容していくところに、夕霧から柏木への転移の軌跡が描かれている。

この「転移」する媒体となるのが女三の宮の降嫁である。夕霧は女三の宮の婿候補に挙がっていたので、無関心ではいられない。女三の宮と野分の日に垣間見た紫の上を比較し、夕霧は女三の宮に侮蔑にも似た感情を抱く。柏木はこの夕霧の対をなす存在として出てくる。六条院での蹴鞠の日、女三の宮を垣間見て惑乱する柏木と対称的に、夕霧は冷静な視点人物としての本領を発揮する。夕霧の役割は、この状況下で決して軽くはない。こうして夕霧は、柏木と女三の宮から一歩退いた場所に立ち、視点人物として物語に関わっていくことになる。

（二）柏木の死と夕霧

女三の宮と密通した柏木は、朱雀院御賀の試楽の日、源氏の

「過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」（若菜下）

という自嘲の言葉を聞く。これは柏木にとって痛烈な皮肉である。源氏は、自身の傷を晒してもなお、柏木を辱めたいのだ。それほどまでに柏木を憎んでいる。言葉に憎悪が絡むと、それは口を突いて出る凶器に等しい。凶器は柏木の身体と心を抉る。あげく、柏木は病に臥すことになる。

柏木巻は若菜下巻から引き続き、病に臥す柏木の様子から始まる。この巻は女三の宮の出産と出家、柏木の死と追憶が主に描かれている。私は、柏木が病床で夕霧に語る場面に焦点を当てて検証したい。

柏木は女三の宮が出家したと聞き、消え入りそうになっている。陀羅尼の声を「け恐ろし」（柏木）とまで感じている。病の回復のための陀羅尼を「死」と捉えているのだ。生と死の交錯する中で、柏木は限りなく死へと近づいていく。

このような柏木を夕霧は見舞うことになる。臨終を間近にした柏木を回復させるために、帝は柏木を権大納言に昇進させた。嬉しく思って回復するのではないか、という帝の配慮からだった。昇進の使者として、彼の親友である夕霧が行くことになった。これが、二人の最後の対面になる。二人の最初の対面は物語中で直接語られてはいない。最初の対面と意識されないほど、夕霧と柏木は幼児の頃から一体化していたと考えられる。

柏木は夕霧の高い身分に遠慮し、病で乱れた姿では会えないと思うものの、それでも会いたい気持ちが勝る。こうして柏木は、身繕いをして面会する。「烏帽子ばかり押し入れて、すこし起き上がらむとしたまへど、いと苦しげなり」(同) とあるように、烏帽子を脱がないのが当時の儀礼である。ここでは、烏帽子という小道具が実に見事に作用している。せめて烏帽子をかぶり、親友の夕霧と話をしようとする二人の友情の深さを伝える働きをなす。この場面が感動的であったことは、国宝『源氏物語絵巻柏木第二段』にも取り上げられていることからも納得できる。

「白き衣どもの、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて」(同) 横たわる柏木は、病人でありながらも嗜み深く暮らしている。そして痩せ衰えたのがかえって優美だ、と語られる。この様子を見た夕霧は、

「久しうわづらひたまへるほどよりは、ことにいたうもそこなはれたまはざりけり。常の御容貌よりも、なかなかまさりてなむ見えたまふ」(同)

と言う。あたかも女性への誉め言葉のようだ。「常の御容貌よりも、なかなかまさりて」は、夕霧の柏木に対する儀礼的な言葉と考えるよりも、「白うあてはかなるさま」(同) を見ての、正直な感想と捉える方が妥当であろう。「白き衣」「白うあてはかなるさま」と「白」が強調されている。「白」というなにも染まっていない色から、夕霧は死に際した柏木に対して清廉な印象を受けたのだ。そしてその印象の中に、柏木の醸し出す色情のようなものも同時に感じている。試楽の日、源氏の目によって柏木は、「〈見られる〉という〈女〉の存在感覚を根源的にひきうけている。(注3)」と高橋亨氏が述べられたように、この対面の場面でも柏木は女性のような描かれ方をしているのである。

夕霧と柏木は、「後れ先だつ隔てなくとこそ契りきこえしか」(同) と、あたかも愛し合う男女のように別れを惜しみ合っている。二人の雁行していた人物のうちの一人が、もう一人から惜しまれて去ってゆく。

柏木の、「さるは、この世の別れ、避りがたきことはいと多うなむ」(同) という言葉は、我が子薫の存在を最大の絆として考えていることを示す。柏木は自ら進んで死への道を歩いている。自分の生命と引きかえにして、次に巡り来る命を得るまでの永い眠りにつこうとでもするようだ。柏木は夕霧に自身の心境と病状を述べる。

親にも仕うまつりさして、今さらに御心どもを悩まし、君に仕うまつることもなかばのほどにて、身をかへりみる方、はた、ましてはかばかしからぬ恨みをとどめつる、おほかたの嘆きをばさるものにて、また心の中に思ひたまへ乱ることのはべるを、かかるいまはのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを誰にか愁へはべらむ。これかれあまたものすれど、さまざまなることにて、さらに、かすめはべらむもあいなしかし。(同)

死を目前にして、心残りが多い。

⑦親に先立つ不孝

㋑主上に仕えることも中途半端

㋒自分の思い通りにならなかった人生

この㋐㋑㋒は世間の誰もが経験することとしてしりぞけ、改めて胸中を告白しようとする。柏木の言葉は事件の中心部分に近づいてゆく。柏木は源氏への取りなしを夕霧に依頼した。

「人数には思し入れざりけめど、いはけなうはべし時より、深く頼み申す心のはべりしを、いかなる讒言などのありけるにかと、これなむこの世の愁へにて残りはべるべければ、論なう、かの後の世の妨げにもやと思ひたまふるを、事のついではべらば、御耳とどめて、よろしう明らめ申させたまへ。亡からむ後にも、この勘事ゆるされたらむなむ、御徳にはべるべき」（同）

「いかなる讒言などのありけるにか」と、柏木はほのめかすような言い方でしか事件の真実を語れない。それでも夕霧にしか伝えられないことを、柏木は告白した。夕霧にとって源氏は父親なので、「事のついではべらば」自分の気持ちを伝えてほしいと依頼する。幼い頃から源氏を頼りにしていた、という気持ちからだ。これらの柏木の述懐に対して夕霧は何とか慰めの言葉を言う。

「いかなる御心の鬼にかは。さらにさやうなる御気色もなく、かく重りたまへるよしをも聞きおどろき嘆きたまふこと、限りなうこそ口惜しがり申したまふめりしか。など、かく思すことあるにては、今まで残いたまひつらむ。こなたかなた明らめ申すべかりけるものを。いまは、言ふかひなしや」（同）

死の予感に触れてたじろぎながらも、己の不幸は不幸として受け入れる。その不思議に澄んだ穏やかさを得るまでに、幾度慟哭をもらしたのか。血を吐くような絶望を何度噛み締めたのか。その柏木を思うと、夕霧には気のきいた慰めも出て来ないのだろう。そして、自分の父親が親友の死の原因になっているとはあまりにも辛い。昔の柏木を取り戻すことができるのならば、夕霧は何でもするだろう。しかし、もう何もかも手遅れの状態になってしまった。

柏木は最後に、落葉の宮の将来についても夕霧に依頼する。ここで、落葉の宮が柏木から夕霧へと譲られた。柏木の遺言は、女三の宮に関連して、源氏への弁明が中心だったと言える。柏木は、「臥したまへる枕上の方に、僧などしばし出だしたまひて」（同）夕霧を迎えた。二人は「早うより、いささか隔てたまふことなう睦びかはしたまふ御仲」（同）である。このような間柄で、さらに二人きりの状況にも関わらず、柏木の述懐は今一つはっきりしなかった。「几帳のつまを引き上げ」（同）てあるのだから、二人の間を隔てるものは何もないはずだ。しかし、柏木の述懐は見えない几帳が存在し、二人の間に心的距離があるようだ。

つぶれそうな孤独を抱えたまま柏木は「泡の消え入るやうにて」（同）この世を去る。この表現について石田穣二氏は次のごとく述べられた。

かなはざる、いや正確には、かなはざるに似た恋に死んだこの青年の死を叙するにふさわしい表現として、私はこの惜辞を解する。そして私は、柏木の巻における、作者の、ひたひたと水

の寄せるのにも似た清冽な感傷の純度の高さをここにも思ふ。[注4]

と。「泡の消え入るやうにて」は、柏木の不幸な、運命的な死の必然性を象徴しているのではないだろうか。柏木の死は「泡」で表現された。対して、紫の上の死は「消えゆく露の心地して」（御法）と語られる。なぜ柏木の死は「泡の消え入るやうに」であり、紫の上の死は「消えゆく露の心地して」なのか。これは単なる修辞上の問題ではない。

比喩としての「泡」と「露」はどちらも消えやすいもので、同じように考えるのが一般的である。しかし、作者にとっては同じことではなかった。『源氏物語』中に、「露」は八十七例あるが、「泡」はわずか三例しかない。[注5]この差は、おそらく作者の周辺環境において、「露」はよく見られるものであるのに対し、「泡」は稀なものであったと考えられる。柏木には「泡」、紫の上には「露」をそれぞれ用いたことには、それだけの作者の意図があったわけである。

柏木は夕霧に、源氏の勘気の許されることを依頼した。しかし、女三の宮との密通が源氏の勘気を被ることは最初から分かっていたはずである。分かっていながら、そのことを顧みる余裕がなかっただけなのだ。それほど柏木の想念が生み出した女三の宮の理想像は完璧であり、彼はひたすらその理想像に殉ずることだけしか考えなかった。その時彼の心の水平線上に権力者源氏の姿など、全く現れて来なかった。御帳台で最初に柏木が見た女三の宮は、

わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色、いとあはれにらうたげなり。（若菜下）

と見える。「いとあはれにらうたげ」な現実の女三の宮は、彼の想念の中の完璧な理想像とはあまりにかけ離れている。その時彼は自分を制御できなくなる。

さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。（同）

こうして密通は遂げられる。この時柏木は女三の宮に言う。

「さらば不用なめり。身をいたづらにやはなしはてぬ。いと棄てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ、今宵に限りはべりなむもいみじくなむ。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、それにかへつるにても棄てはべりなまし。」（同）

この言葉から女三の宮との密通にあたって、すでに柏木が死を覚悟していることが分かる。鈴木宏子氏が「想い人の共感を得られぬまま焦がれ死する自らの運命を言いあてているのである。[注6]」と述べられている。では、なぜ死の直前になって源氏の許しを乞うのか。この矛盾は柏木の理想像の崩壊を意味するものだと私は思う。「泡の消え入るやうにて」の比喩はこの崩壊を表現する。理想像はそれが完璧であればあるほど、ますます現実から遠ざかる。それは水の泡が跡形もなく消え入るようだ。「泡」には、その背景に「流れ」のイメージがある。流れに浮かびながら消える「泡」は、理想の女性への恋で自滅し、妻にも面会できなかった男の孤独を表す。「泡」は崩壊感覚そのものである。そして「露」は、紫の上と明石の中宮

が詠んだ歌にあるように、「草葉」が背景にある。「露」は、養女である明石の中宮に手をとられ、「限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて」（御法）死んでいった女の消滅というイメージがある。作者にとって「泡」と「露」の使い分けは必然のことであった。

ここにおいて柏木の死は自己完結する。同時にそれは、「生ける仏の御国」（初音）とたたえられた六条院の崩壊をも暗示するのである。

（三）柏木死後の人々

柏木の死の直後に落葉の宮の様子が描かれる。落葉の宮は柏木に死なれても、特に恨むこともないと言う。また落葉の宮の母・一条御息所は、「いみじう人笑へに口惜し」（柏木）と思っている。「「人笑へに」それを押してゆけば、死んだ柏木がけしからぬ、ということになる。[注7]」と玉上琢彌氏が述べられている。柏木の死ではなく、臣下と結婚して、その夫に先立たれた落葉の宮の不幸のみを考えているのだ。

続いて女三の宮は病床の柏木を、「世にながかれとしも思さざりしを」（同）と思う。柏木の回復を願う気持ちもなく、生きていれば迷惑だと言わんばかりの、彼女の保身の思いがあるだけだ。それでも柏木が死んだと聞くと、「さすがにいとあはれなりかし」（同）と思うが、それ以上ではない。

この後、薫の五十日の祝いへと進み、明るい雰囲気である。柏木の死を払拭するかのようだ。そして、「あはれ、はかなかりける人の契りかな」（同）と源氏が薫を見て心中で思う。ここではじめて柏木の死を悼む人が描かれ始める。

夕霧は、臨終の時の柏木の言葉に不審を抱き、回想する。どのようにも解釈できる曖昧な言葉であったからだ。蹴鞠の日以後の柏木の女三の宮への異常なまでの関心、死の直前に柏木の見せた源氏への怖れ。これらの細切れの場面をつなぎ合わせた夕霧は、ようやく事件の真相に近づいてきたからこそ、「面影忘れがたうて、はらからの君たちよりも、強ひて悲しとおぼえたまひけり」と柏木の臨終の様子を思い出しては、後悔の念を抱いている。このことは、

なほ昔より絶えず見ゆる心ばへ、え忍ばぬをりをりありきかし、いとようもて静めたるうはべは、人よりけに用意あり、のどかに、何ごとをこの人の心の中に思ふらむと、見る人も苦しきまでありしかど、すこし弱きところつきて、なよび過ぎたりしけぞかし、いみじうとも、さるまじきことに心を乱りて、かくしも身にかふべきことにやはありける、人のためにもいとほしう、わが身は、いたづらにやなすべき、さるべき昔の契りといひながら、いと軽々しうあぢきなきことなりかし、など心ひとつに思へど、女君にだに聞こえ出でたまはず、さるべきついでなくて、院にも、また、え申したまはざりけり。さるは、かかることをなむかすめしと申し出でて、御気色も見まほしかりけり。

（同）

ということからも分かる。柏木の性格を回想し、死へと歩んでいった行動について、非難している。源氏・柏木・女三の宮の三者が事

件に対して「宿世」(注8)を感じるのとは逆に、夕霧は「さるべき昔の契りといひながら、いと軽々しうあぢきなきことなりかし」と納得し難い気持ちである。柏木との最後の対面で感じた心的な距離を縮めようとして、夕霧は密通事件の真相に近づきたいと思い、源氏の「御気色も見まほしかりけり」と展開してゆくのではないだろうか。何もできずに柏木を見送ってしまったという激しい悔恨と、心の底に燻り続ける親友への想いが幾重にも絡み合い、柏木の死が受け入れ難いのだ。

一条宮を訪ねた夕霧は、御息所の話を聞くことになる。母親の娘を想う気持ちから、落葉の宮の不幸を理解する。そして、

「あやしう、いとこよなくおよすけたまへりし人の、かかるべうてや、この二三年のこなたなむ、いたうしめりてもの心細げに見えたまひしかば、あまり世のことわりを思ひ知り、もの深うなりぬる人の、澄み過ぎて、かかる例、心うつくしからず、かへりてはあざやかなる方のおぼえ薄らぐものなりとなむ、常にはかばかしからぬ心に諫めきこえしかば、心残しと思ひたまへりし。よろづよりも、人にまさりて、げにかの思し嘆くらむ御心の中の、かたじけなけれど、いと心苦しうもはべるかな」

(同)

と、柏木を回想して落葉の宮に同情した。夕霧は柏木の近くにいながら、彼の心中には立ち入れなかったことがこの言葉から分かるであろう。

柏木の遺言通りに落葉の宮を訪問した夕霧は、亡き親友の妻へ純粋な好意を示している。柏木のことを語り合える人を、夕霧は求めているのだ。帰り際に、

時しあればかはらぬ色ににほひけり
片枝枯れにし宿の桜も (同)

と詠んだ歌は落葉の宮を慰めるものである。この歌で夕霧は落葉の宮を慰めながら、自分の心をも慰めているのではないだろうか。出会いと別れを繰り返しながら、人は時間を重ねていくものなのだ。振り返れば、そこには過去が確かにある。運の明暗を問わず、自分の足で踏みしめてきた喜怒哀楽がある。そのしがらみに身も心も囚われ、それでもなお、前を見据えて生きていかねばならない、と夕霧は自身を奮い立たせていると言える。

一条宮を辞した夕霧は、そのまま致仕の大臣のところへ行き、致仕の大臣の悲嘆ぶりに夕霧も涙する。世間一般の人望や官位でなく、柏木本人を恋しく思う親の心が切々と描かれる。致仕の大臣・夕霧・弁の君の唱和はここでなされた。

木の下のしづくにぬれてさかさまに
かすみの衣着たる春かな (大将の君)
亡き人も思はざりけむうちすてて
夕のかすみ君着たれとは (弁の君)
うらめしやかすみの衣たれ着よと
春よりさきに花の散りけむ (同)

これらの歌は、子に先立たれた致仕の大臣の着る喪服についてのものだ。柏木への挽歌にはなっていない。そして、ここではじめて柏

木の法要について語られる。柏木の妹である雲居雁はもちろん、夕霧も手厚い志を示した。

四月に一条宮を訪問した夕霧は、「柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたる」（同）のを見て、

「ことならばならしの枝にならさなむ
葉守の神のゆるしありきと

御簾の外の隔てあるほどこそ、恨めしけれ」（同）

と歌を詠んだ。柏木から落葉の宮の後見を譲られたことを言いなしている。柏木と楓を連理の枝に見立て、〈柏木と落葉の宮〉〈夕霧と落葉の宮〉という過去と未来の人間関係を表す。この歌に落葉の宮は、

「柏木に葉守の神はまさずとも
人ならすべき宿の梢か
うちつけなる御言の葉になむ、浅う思ひたまへなりぬる」
（同）

と返した。夫は亡くなったが、他の人を近付けることはできない、と言ったのだ。夕霧もいかにもと思い、苦笑した。男女の関係になることを夕霧は本気で求めたのではない。落葉の宮の反応を見たかったのだろう。

落葉の宮の反応に満足した夕霧は、「今は、なほ、昔に思ほしなずらへて、疎からずもてなさせたまへ」（同）と懸想めいてではないが、意味ありげに言う。男として柏木同様にということではなく、柏木との男同士の友情関係が基底にあり、その遺言を果たそうという決意表明だと考えられる。

柏木巻の終わりで多くの人が「あはれ、衛門督」（同）と、柏木の死を悼むことが語られる。この多くの人の「あはれ」という言葉は、前途有望な青年に向けられたものである。これは彼の一面ではあるが、すべてではない。柏木没後の人々の様子は、藤壺や紫の上に比べて感銘が薄いように感じられる。妻と愛した人には悲しんでもらえず、柏木の親は息子の死んだ原因を知らずに逆縁を嘆く。夕霧は親友の死に納得していない。そしてその未亡人を見舞っている。一見、親友への裏切り行為のようだが、供養の一環の働きをなす。

柏木への哀悼は、その死を悼まない人から書かれる。そして順に悲しみの度合いが増していく。柏木巻は柏木のためにあり、その内面が深く描かれたため、故人を偲ぶ記述が少ないのだと言える。[注19] 絶対的な孤独の中で死を選んだ柏木を印象付ける最適の方法ではないだろうか。

第二章　夕霧の姿勢

（一）柏木の一周忌

横笛巻は柏木の一周忌から始まる。

御はてにも、誦経などとりわきせさせたまふ。よろづも知らず顔にいはけなき御ありさまを見たまふにも、さすがにいみじくあはれなれば、御心の中にまた心ざしたまふて、黄金百両をなむ別にせさせたまひける。（横笛）

と源氏の供養が語られる。薫のために黄金百両を別に寄進もした。こうして作者は柏木を慰める物語を徐々に手厚く描いている。夕霧も柏木の兄弟たちに負けないほどの心遣いをし、落葉の宮にも誠意を示して、ここに夕霧と落葉の宮という新たな人間関係は確実に始動していく。

源氏は薫を愛しく思う。薫が無心に筍をかじっているのを見た源氏は、

うきふしも忘れずながらくれ竹の
こは棄てがたきものにぞありける（同）

と詠む。この歌によって〈柏木と薫〉という真の親子関係が浮かび上がってくる。「こは棄てがたきもの」という父親（柏木）の子（薫）への執着が物語の中心となってくる。

源氏は、薫が生まれてくるために柏木と女三の宮の密通があり、柏木の死もあったと考えた。逃れられぬ運命として源氏はこれらを受け入れた。人は誰かと巡り会うために生まれてくるのだ。その数ある出会いの中から、共に人生を歩み、苦楽を分かち合うべき相手を見出すのである。真実の出会いもあるだろう。錯覚もあれば打算もあるだろう。どういう形を取るにせよ、人を愛するということは、良くも悪くも何かを「産む」ことなのである。

作者は柏木の死の直後に彼の死を悼まない人々を描き、柏木を放置していたことは前章でも述べた。それが、柏木巻の終わりから横笛巻の始めでは柏木は慰められてきた。しかし源氏は、

この宮こそは、かたほなる思ひまじらず、人の御ありさまも思ふに飽かぬところなくてものしたまふべきを、かく思はざりしさまにて見たてまつることと思すにつけてなむ、過ぎにし罪ゆるしがたく、なほ口惜しかりける。（同）

と、女三の宮の尼姿を見ると二人の罪が思い出されると言う。これまでにも、「いかにぞや思し出づることはありながら」（同）「うきふしも忘れずながら」とあり、柏木の人柄を知り、彼の死を悼みながらも密通事件は源氏の心に深く刻み込まれている。また、「罪ゆるしがたく」とまで思うことからも、柏木は成仏できていないだろうことが分かる。

この後に夕霧が柏木の遺言を思い出すことが語られる。夕霧は「かのいまはのとぶらめにとどめし一言」（同）を早く源氏に伝えたいと思うものの、その機会を見つけられない。果たせない約束が夕霧の胸を締めつける。そして、夕霧がなかなか源氏へとりなしてくれないので、柏木は夕霧の夢で催促することになる。

（二）夢に現れた柏木

夕霧は落葉の宮を訪問する。落葉の宮は琴を弾いているところだった。夕霧は琴が置かれたままの南の廂の間へ通され、衣擦れの音や香ばしい匂いを残して落葉の宮は奥へ退がる。和琴を引き寄せた夕霧は「いとよく弾きならしたる、人香にしみてなつかしうおぼゆ」（同）とあり、夕霧は落葉の宮に惹かれる。

かやうなるあたりに、思ひのままなるすき心ある人は、静むることなくて、さまあしきけはひをもあらはし、さるまじき名をも立つるぞかし（同）

と思いながら夕霧は琴をかき鳴らしている。

この描写は実に巧妙だと言えよう。雲居雁との関係に没頭し、「すき心」など持っていないと夕霧は考えている。その自分ならともかく、他の男ならここで浮名を流すだろうと思いつつ、夕霧の手は知らず知らずに琴に触れているのだ。自分の中にある「すき心」が琴に投影されていることに、夕霧自身は気付かない。柏木を失った夕霧は、己の魂の半身を落葉の宮に求めようとしているのだ。

夕霧は柏木のためにも、と落葉の宮に琴の演奏を頼む。彼女はすぐには承知できず、夕霧も強引には頼めない。しかし、空には月が出て「翼うちかはす雁がね」（同）が渡っている。「月」がこの巻では、柏木の象徴のように使用されているのではないだろうか。落葉の宮の柏木への想いが「雁がね」や想夫恋に込められている。その落葉の宮の想いは、柏木個人への愛という性質のものではない。落葉の宮もまた、自分の魂の半身に対する欲求が、無意識のうちに表れたのではないだろうか。母の御息所や致仕の大臣に対する配慮から、落葉の宮は夕霧との関係を避けていく。それでも落葉の宮自身は魂の半身を求めている。そこへ夕霧が参入することになり、二人は想夫恋を合奏した。

落葉の宮と歌を交わした夕霧は暇を告げ、

この御琴どもの調べ変へず待たせたまはんや。ひき違ふることもはべりぬべき世なれば、うしろめたくこそ」（同）

と意味深長な言葉を残し、帰ろうとする。このときに御息所は夕霧に横笛を渡す。彼女は古いいわれもあるようだが、こんなところに埋もれさせるのは惜しい、と言う。横笛は男性の楽器であって、笛を吹かない女性ばかりの一条宮には不要である。夕霧はその笛を吹いてみるものの、盤渉調の途中でやめた。夕霧にはどうしてもその笛を吹くことができない。

「みづからもさらにこれが音の限りはえ吹き通さず。思はん人にいかで伝へてしがな」（同）

との生前の柏木の言葉を思い起こすからだ。笛の持つ力を最大限に引き出すことのできる「誰か」を柏木は思っていたのではないだろうか。[注10] 柏木は己の笛の音から自分の限界を知ったのだろう。

横笛の調べはことにかはらぬを
むなしくなりし音こそつきせね（同）

と詠んだ夕霧は、音色の変わらない横笛と失われてしまった柏木を想ったのだろう。柏木を失った痛みを抱えながら夕霧は家に帰る。

横笛をもらって帰った夕霧は、「月」を眺め、御簾を巻き上げて横になる。「月」は柏木の象徴であるにも関わらず、御簾を巻き上げたのだ。この時の夕霧は、雲居雁と落葉の宮を照らし合わせていた。性質の違う二人の妻を持とうとする夕霧の機先を制するように、柏木が生前のままの袿姿で夕霧の夢に現れる。そして柏木は、

「笛竹に吹きよる風のことならば
末の世ながき音に伝へなむ
思ふ方異にはべりき」（同）

と言う。自分が伝えたいと思っていたのと異なるところに笛が伝わった、と訴えるのだ。では本当に伝えたい人は誰なのか、と尋ね

ようとした矢先、夕霧の子どもが激しく泣いて乳を吐いたりする。ここで夕霧は夢から覚めた。

こうして夕霧と柏木は、夢の中ではあるけれども、一瞬の再会を果たした。後世の作品ではあるが、『雨月物語』の中の「菊花の約」が、この場合と同一のパターンと考えられるのではないか。しかし、この〈夕霧と柏木の夢での再会〉という友情物語は、〈柏木と薫〉の親子の物語に挿入されている。それにもかかわらず、夕霧と柏木の遙かな時空を越えた出会いは、二人の魂を結びつけるものであった筈である。

柏木の霊は御簾の隙間から入ってきた。この隙間は夕霧の世界の綻びとなる。夕霧の世界とは、これまで夕霧と雲居雁が十年の歳月をかけて築いてきた世界である。雲居雁は必死でそれを守ろうとしている。御簾を閉じて寝ていたのは彼女であり、夕霧が御簾を巻き上げたことを責めたのも彼女である。対して夕霧は、意図的に綻びを作り出そうとするかのようだ。こうして夕霧と雲居雁の二人の世界は、落葉の宮も含む世界へと変貌してゆく。

作者は柏木を完全に成仏させていなかった。成仏していたならば、遺愛の横笛が夕霧の手に渡ろうと、柏木の霊が現れることもなかったのではないか。遺愛の横笛を構想した作者は、柏木の霊に横笛は夕霧でなく、他に伝えたい者がいると言わせたかったのだ。これは、我が子という血の絆を残した柏木の未練が疼くさまを表現する。そして、音楽伝承の神秘性を語り、物語にドラマティックな効果をもたらしている。

夕霧は夢の内容を反芻し、自分が笛を持つべきではないと判断すると、その正当な所有者に渡すことを考える。また、夕霧は愛宕と柏木の帰依していた寺で誦経をさせた。この供養は、柏木の霊を少なからず慰めたことであろう。

（三）源氏と夕霧の対話

六条院を訪問した夕霧は、皇子たちと一緒に遊んでいた薫をじっくりと眺めた。薫は柏木によく似ていると思い、謎のすべてが解けるように思う。もちろん源氏もそのことに気付いているだろう、と夕霧は思い至る。反面、「まさか」という気持ちもある。

複雑な気持ちのまま源氏に会った夕霧は、一条宮の様子などを話す。源氏は、

「かの想夫恋の心ばへは、げに、いにしへの例にもひき出でつべかりけるをりながら、女は、なほ人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ、と思ひ知らるることどもこそ多かれ。過ぎにし方の心ざしを忘れず、かく長き用意を人に知られぬとならば、同じうは心清くて、とかくかかづらひゆかしげなき乱れなからむや、誰がためも心にくくめやすかるべきことならむとなん思ふ」（同）

とわが子夕霧に忠告している。夕霧の「すき心」を源氏は感じ取ったのだ。また、源氏の落葉の宮への批判には、女三の宮の密通事件が影を落としているのだろう。この心情を夕霧は解さず、人のことはよく分かると冷たい目を向ける。そして、自分と落葉の宮のことを

「何の乱れかはべらむ。なほ常ならぬ世のあはれをかけそめはべりにしあたりに、心短くはべらんこそ、なかなか世の常の嫌疑あり顔にはべらめとてこそ。想夫恋は、心とさしすぎて言出でたまはんや、憎きことにはべらまし、もののついでにほのかなりしは、をりからのよしづきて、をかしうなむはべりし。何ごとも、人により、事に従ふわざにこそはべるべかめれ。齢なども、やうやういたう若びたまふべきほどにものしたまはず、また、あざれがましうすきずきしき気色などにもの馴れなどもしはべらぬに、うちとけたまふにや。おほかたなつかしうめやすき人の御ありさまになむものしたまひける」（同）

と弁護する。御息所から渡された横笛のことや、昨夜見た夢のことを話す夕霧に源氏は「その笛はここに見るべきゆゑある物なり」（同）と答えている。陽成院から故式部卿宮を経てきた、と笛の由来を話すが、「ここに見るべきゆゑ」は一切語らない。笛はこちらに渡すように、という源氏の夕霧に対する強い姿勢が窺える。源氏は夢を信じる人であり、また夢を正しく理解できる人である。

夕霧は源氏の顔色を見ていたが、その深刻な表情から真実を察知する。そこでさも今思い出したように、柏木が源氏に誤解されることがあって気にしていた、という遺言を語った。「いとたどたどしげに聞こえたまふに」（同）と、相当の演技力を見せたが、准太上天皇の貫禄でこの場を切り抜ける。夕霧はそれ以上の追求もできず、横笛を巡る親子の対決は曖昧なままに終わった。だが、曖昧なままで終わることが、柏木の霊を慰めると言えるのであろう。秘密の漏洩を柏木は望まない。

柏木から夕霧・源氏を経て薫へと横笛が伝えられていく。その過程に、柏木から源氏への謝罪の念も伝達されたと言えるだろう。

血、ただそれだけを通して笛の音は薫に伝わったのだろうか。生前一度も会わなかった父の音楽が子の中に伝わってゆく不思議は、血の不思議である。同時に人知の枠を越えた音楽の深遠さを感じさせる。

夕霧はのちに薫の笛の音色を聞く。

笛は、かの夢に伝へし、いにしへの形見のを、またなきものの音なりとめでさせたまひければ、このをりのきよらより、または、いつかははえばえしきついでのあらむと思して、取り出たまへるなめり。大臣和琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将の御笛は、今日ぞ世になき音の限りは吹きたてたまひける。（宿木）

薫の笛の音色から夕霧は、千もの言葉よりも多く万感の想いを抱くだろう。薫のこれからの人生と、親子の深い縁まで思い至るのは最早夕霧以外に存在しない。

おわりに

夕霧と柏木の関係を見てきたが、彼らは親友という以上に、なくてはならない存在であったと考えられる。なかなか出世できない柏木は、既に高い地位にいる夕霧に劣等感を抱き、一方の夕霧は、音

楽の才がある柏木に一目置いていた。

この二人の関係を突き崩すのが、女三の宮である。夕霧が女三の宮を批判したのに対し、柏木は彼女の姿に魂を奪われてしまった。この瞬間に、夕霧と柏木の歩んでゆく道が異なった。夕霧は、女三の宮への恋によって死にゆく親友の姿を間近で見る。人が人と出会うとき、そこに何かが始まるのだ。その出会いが「幸」をもたらすか、「不幸」を呼び込むのか、あらかじめ知る術はない。女三の宮が柏木を不幸に導いたと知った夕霧は、やるせない思いであっただろう。

柏木の死によって、夕霧に新たな出会いが訪れる。それが落葉の宮との関係だ。雲居雁・藤典侍・紫の上以外の女性にはほとんど目もくれなかった夕霧が、なぜ落葉の宮へ気持ちを傾けていくのか。小西甚一氏は、夕霧の柏木事件への「もどき」と述べておられる。(注11) 確かに「もどき」の要素はある。しかし、私は夕霧が落葉の宮へ向かってゆくのは、彼女が柏木に似ているからであると考える。女三の宮の愛を得られなかった柏木と、柏木の愛を得られなかった落葉の宮。男性と女性という違いがあるものの、性別を越えたさらに深いところで柏木と落葉の宮は似ている。夕霧は、自覚しないままに、落葉の宮の中に柏木の面影を重ねて見ていたのである。

また、柏木から夕霧へと落葉の宮が譲られることで、男性同士の絆が確固たるものになる。女三の宮の存在が夕霧と柏木の心的な距離を作ったのに対し、落葉の宮は二人の関係強化の働きを担っているのではなかったか。

『源氏物語』には、様々な愛が描かれている。互いをいたわり合う愛もあれば、愛するゆえに己を他人を傷つけずにはおかない愛もある。婚姻は二者の精神的な一致であり、その根底に魂の出会いがあると言える。その魂の結びつきが結婚である。結婚は男と女が夫婦になることを言う。しかし、「結婚」は「結魂」だとさえ思う。

人の魂は、もともと一つであったのが、半分に分けられて二つの身体に封印されているのだろうか。それゆえ、裂かれた魂は痛みに震え、欠けた半分を欲して互いが互いを悲しいほどに呼び合うのだ。人の世の出会いと別れは、欠けた半分の魂を求め、あてどなくさすらうためにあるのだろう。

柏木は、自身の魂の半身が女三の宮であると信じていた。しかしそれは、柏木が思い描いた幻影でしかなかった。誰よりも強い信頼で結ばれていると夕霧と柏木が互いに感じ取ったのは、皮肉にも柏木の臨終の時だった。私は、夕霧こそが柏木の魂の半身であると思う。真に巡り合うために生まれついた魂というのは、何度引き裂かれても、周りに何があろうとも、結局惹き合わずにはいられないのだろう。

作者はこの物語で、魂の半身を求め続ける人々の悲しさ、激しさ、愛しさを語っているのだと思う。作者が人間への様々な想いを込めた『源氏物語』は、私たちの心をしっかりと捉えて決して離さない。

注

（注1）高橋亨『源氏物語の対位法』（六七頁）

（注2）注1参照（六七頁）

（注3）注1参照（一一二頁）

（注4）石田穣二『源氏物語論集』（三一一頁）

（注5）池田亀鑑『源氏物語大成』（第八冊・四二五～四二六頁、第七冊・三十七頁）

（注6）鈴木宏子「柏木の物語と引歌」（「國語と國文學」平成四年六月・一二～二三頁）

（注7）玉上琢彌『源氏物語評釈』（第八巻一〇五頁）

（注8）源氏は「わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなめり」（柏木）と考え、柏木は、「神仏をもかこたむ方なきは、これみなさるべきにこそはあらめ」（同）や、「いかなる昔の契りにて、いとかかることしも心にしみけむ」（同）と思っている。女三の宮は「げにかかるべき契りにてや思ひの外に心憂きこともありけむ」（同）と考えている。

（注9）同様の考えを今西祐一郎氏が、「哀傷と死―源氏物語試論―」（「國語國文」）昭和五十四年八月・一六～一七頁）に述べられている。

（注10）同様の考えを深沢三千男氏が、「横笛巻ところどころ」（「神戸商科大人文論集」昭和五十八年三月・一二～一三頁）で述べられた。

（注11）小西甚一「苦の世界の人たち―『源氏物語』第二部の人物像―」（「國文学」昭和四十三年十一月・四頁）

本文の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠った。

本稿を成すにあたり、御指導賜った西木忠一先生に厚く御礼申し上げる。